

A LAODICEAN の文体的特徴

佐 藤 孝

Some Stylistic Features of "A Laodicean"

Takashi SATO

(昭和54年10月31日受理)

This essay is a stylistic approach to the linguistic features and fluidity of Hardy's novels, mainly with reference to the style of his earlier novel, "A Laodicean". Nearly all of his common themes and motifs appear in his earlier novels in various forms, but the present writer concludes that they are not always developed organically inside the plot.

Since effective style-study is to lie somewhere between hard-line linguistics and subjective criticism, the standpoint of the present writer is to treat Hardy's style in its relation with the theme of his work. The writer makes a guess that what motivated Hardy to use a hypothetical observer, a surrogate and pseudo-antonomasia can be traced to his unconscious wish to escape from the direct commitment to life, and also to the importance he attached to fluidity of the story.

1

ある主題に対してどのような表現手段を用いるかは、作者の精神的洞察の深さ、言語に対する認識と信頼によって決定されるであろう。具体的には作者の選ぶ用語、統語法、視点、形象等として現われるので、筆者はこうした言語事実を考察することによって作者の芸術的主張を理解することができるという考え方を肯定する立場にある。

小説が言語を素材とし、統一のとれたある美的形式によって芸術的小宇宙を形成すべき機能を次第に失ない、事象の羅列になりつつあることを指摘し、Hardyは小説からの後退を明言する。これはHardyが小説において統一、調和を重視した作家であることを示すものであるが、現実と理想の離反から生じる悲劇性を高める為に矛盾する構造を意識的に作中に持ち込み、アイロニーの効果を生かす手法を用いたことも事実である。尊敬すべき者が不可避の運命に巻き込まれる悲劇を冷酷に描く筆は、時には彼の抱く理想の小説像を裏切ることもなった。彼の小説に描かれる悲劇性は小説の終末でその人物の魂を破滅させる「魂の悲劇性」であり、Hardyの自意識と苦悶に通じる悲劇である。“Tess of the D'Urbervilles”では自我の蔑視と自卑がTessを破滅させ、人間生活の不条理な局面と生の苛酷を具現する。このことはそれまでの小説における人間観を完全に否

定するものではなかったのだが、人間の姿を凝視しそれを実証する態度であって、人間を取り巻く事象と人間の対決を追求する新しい小説の方法を提唱するものであった。この小説観を支持できぬ当時の識者、一般の読者層が誹謗する中でHardyは道徳的立場からの攻撃に晒される恐れもなく、抽象的表現が可能な詩作へと転じることになる。これはHardyが詩の真実感と詩が文学で最高の地位を占めるという意識を青年時代から抱いていたからでもある。Hardy自身、全小説におけるよりも詩の百行の中に自伝的要素があると述べている通り、特に短篇の詩は物語的色彩が濃厚で、その後の詩への傾倒がうかがわれる。

一方、この自伝的要素という点では初期の minor novels, 特に後期の大作に比べ質的に疑問が多いとされる小説の中に長篇においては隠されている特質、自伝的要素が姿を見せる点に注目する必要がある。例えば、“An Indiscretion in the Life of an Heiress”の中で建築家の助手ではあるが、芸術的資質を備えた感受性の強い青年としてのHardy, “Desperate Remedies”でShakespeareを熟読しその想像力の為に社会的環境から孤立するHardy, “Under the Greenwood Tree”の中でTranter Reubenに姿を変えているHardyの父と、明らかに彼の青年期に符合する人

物が登場する。こうした小説では、文体の点においても本質的なものが晶化されて素直に現われ、簡潔に事実を提示する手法がとられていることが多い。“A Laodicean”は作者が病床にあり、口述を余儀なくされた作で、‘the honoring of a contract to publish rather than of an artistic obligation’ (1) とする評者もいるが、この病気は彼に思想的深さを与え作者の体質や本意が随所は吐露されており、再評価を要する作品である。これは懐疑や否定から人道主義的な希望へと推移するHardyが、創作においては知的要素よりも感情を重視するからであって、J. M. Murry は作家のこの傾向を一般論として次のように述べていることによってもHardyの立場を理解できる。

The part played by the intellect in the work of literary creation is essentially subordinate, though its subordinate function may be much more important in one writer than another. Its most characteristic employment is to explicate the large and complex emotional conviction, which is sometimes called ‘a writer’s philosophy’, and may with less danger of misinterpretation be called his ‘attitude’, the element which determines his mode of experience and gives unity to his work as a whole. (2)

“A Laodicean”の中でPaulaが自らの生き方について語る言葉はHardyの小説に一貫して流れる人生観である。道徳、法律、慣習といった制約を持たず、宇宙の時間的進行の中に推移する自然の美しさを楽しむHardyは、その中に生きる人間が特定の主義を持つことに共感を示さない。

I may be a lukewarm anything. What I really am, as far as I know, is one of that body to whom lukewarm is not an accident but a provisional necessity, till they see a little more clearly. (3)

こうして作者の生き方が素直に語られており、更に人物配置、性格の対照を中心とした構成にも後期の作品の基盤をうかがうことができる。同時に後期の大作の中で弱点とされるもの、例えば偶然の事件が都合よく起きるとか、人物が典型的になったり、人間世界の現実を自然の意志であるかのように再構成するといった点も既にこの初期の作品に存在している。

創作におけるHardyの目的は完全なStyleを作り上げることよりも、むしろゆったりとした進行の中に飾りのない物語を伝えることにあった。つまり独

自の構成、表現様式を創造することより、心の赴くままに表現することに熱心であり、一定の小説の規格の中に事件や人物を配置することにあまり意を用いない作家と言える。Hardyの小説にみられる偶然の出来事も、彼があらかじめ配置しておいた出来事ではなく、運命の代行者としての必然の事件であり、創作上の技巧ではない。“The Hand of Ethelberta”で言及されるStyle(4)の語はEthelbertaが自作の物語に真実性を与えるものは、物語の本質的価値よりむしろ表現の過程であると考え、De Foeの文体を摸し偶然と思われる事件、背景と人間の運命の間に微妙な調和を与えることにより人々に感銘を与えようとするelocutionを意味する言葉であり、上記の創作上の態度と矛盾するものではない。

この小論では、上述のように自伝的要素を含め、本質的なものが素直に表現されているminor novelsを“A Laodicean”を中心に主題と文体の関連という点から考察し、創作の過程、手法を探ろうとするものである。

2

“A Laodicean”の基調は次頁の図式で示すことができる。Hardyには愛を一人の女性をめぐる二人の男性という形式で描く作品が多く、この作品でも、Paulaに対してSomersetとCaptain de Stancyの二人が愛情を寄せ、Paulaが二人に応諾を与える形がとられる。しかし、この関係はこの作品の場合、下部構造に過ぎず、新しい理念と新しい社会への目的意識が主題となり、後年に宇宙的規模で確立される社会改良主義という統一理念がPaulaの新貴族主義への憧れという形で表現される。

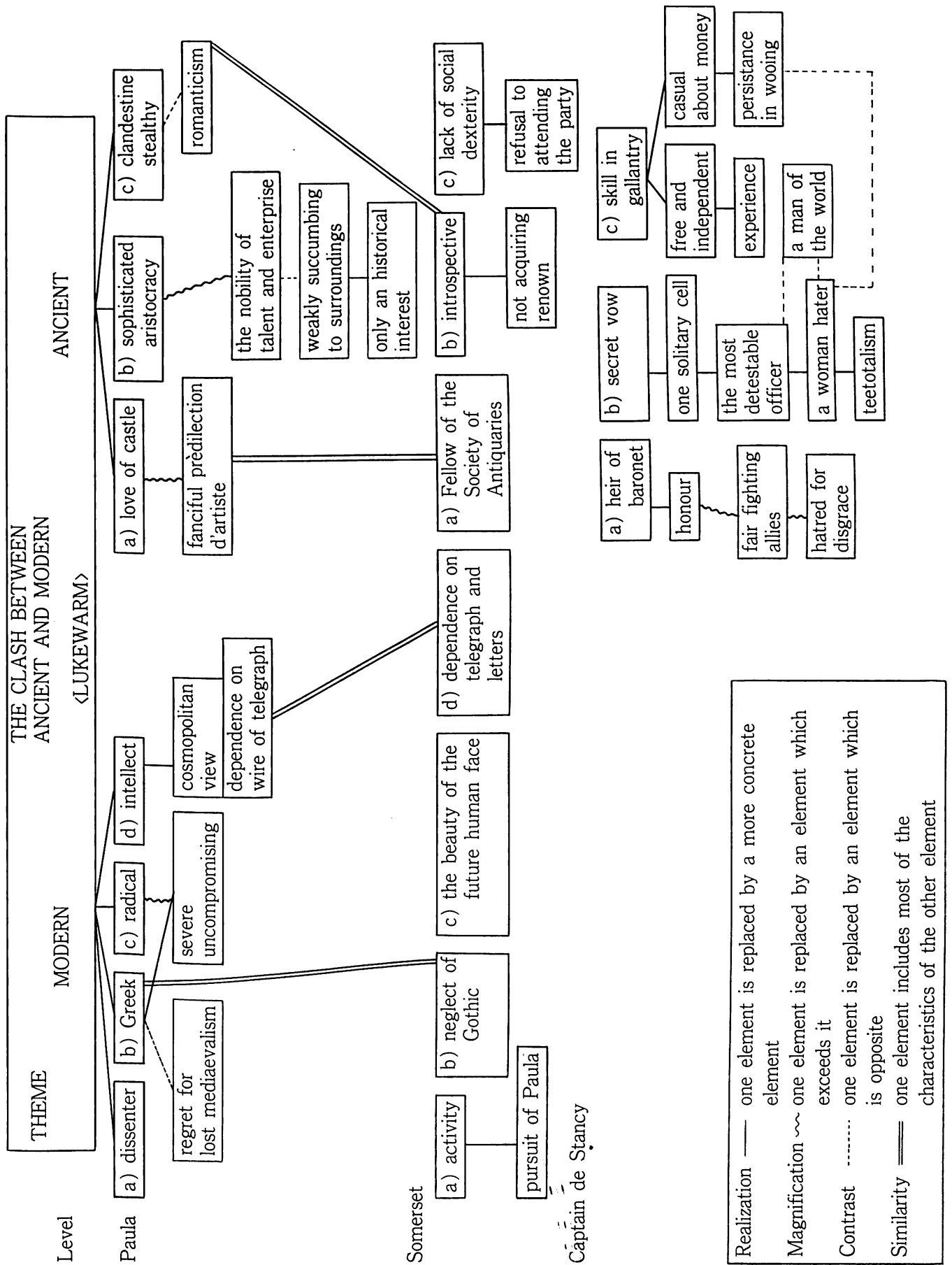
Wessex小説の流麗な自然描写とは違って、読者は冒頭の電信線の描写に奇異の感を抱く。

The wire sang on overhead with dying falls and melodious rises that invited him to follow; while above the wire rode the stars in their courses, the low nocturn of the former seeming to be the voices of those stars,

Still quiring to the young-eyed cherubim. (5)

この電線は全人類が知的にも倫理的にも類似していることを物語る現代精神の化身として、Stancy Castleを守るべき砲塔から逆に城の内部に侵入する。ここからHardyの筆は意欲的に秩序、価値感の顛倒を剔出しながら核心へと進んで行く。Stancy Castleが表象する古い世界は絶えずPaulaの心をCaptain de Stancyへ、旧教へ、封建の遺跡へと引き入れる

A LAODICEAN の文体的特徴



が、HardyはPaulaを必然の結果としての‘a Laodicean’として描く態度を堅持し、新しい理念を模索するPaulaの姿が読者の心に刻み込まれる。その結果、“The Hand of Ethelberta”における「隼」と「野鴨」の情景のように象徴的意図で描かれるStancy Castleや絵画などは観念的な描写になり象徴としての力を失っている。“the turmoil between ancient and modern”の主題に添って人物の行為の動機に焦点が合わせられているからである。

Mr. Power, Dareの画策でPaulaとの意志疎通もままならぬSomersetの心を、自然の移り変りに託す描写もその一例で、距離をおいて回想する形で、知的な視覚によって捉えられた映像が観念的に美化された特有な屈折をみせる表現である。

Tepid airs and nipping breezes met on the confines of sunshine and shade; trembling raindrops that were still akin to frost crystals dashed themselves from the bushes as he pursued his way from town to castle. (6)

心理を細かな要素に分析し自然の形象を借りて全体的構成にする理知的な文体で、具象的な部分に意を用い、物語の進行と変化を調節する働らきを持っている。

Hardyの作品に共通する文体上の特徴の一つは、仮定の人物を登場させ、そこに視点を設定する手法から生まれる。これは人生の‘a detached observer’であろうとするHardyの人生観から生まれた手法である。英国小説における語りの一系譜はHenry Fieldingによって始められ、Jane Austen, George Eliotと続く三人称による語りの形式であるが、Fieldingの場合その語り手は半ば公然と作中に登場する。しかしEliotからHardyに至る過程でこの‘an explicit narrator’は、時折もしその場に居合せたならという仮定の観察者となり、Hardyの初期の小説では作者の代行者としての役割を担うようになる。この代行者はdescriptive wordsで語ることで事実や心理についてのcontinuityは殆ど完成し、読者の想像の余地は少なくなり、心理的負担は軽減される。作者は文字の結合によって場面を構成し、形象をほぼ完成した形で読者に提供している。この説明的な描き方は当然ながら速度が遅く息の長い文章を生むが、視点が明確である為に、難解さは避けられている。しかも場面や、登場人物の感情の展開がある規制の元におかれ、言語の表層は比較的単純である。

この代行者は長く一つの場面に留まることはなく、視点はやがて三人称としての語り手、あるいは登場

人物によって受け継がれることになる。この視点の移動は一つの手法に固執せずむしろ主題を読者に効果的に伝える為に色々な状況を作り上げることを重視する結果であろう。

(1) … a person who had heard her words without seeing her face would have assumed perfect equanimity to be the mood which expressed itself with such quietness. This was the case with her aunt, who was looking out of the window …… (7)

(2) Observers were sometimes half inclined to think that her cuts and modes were acquired by some secret communication with the mysterious clique which orders the livery of the fashionable world. (8)

(3) Had a looker-on been posted in the immediate vicinity of the barrow, he would have learned that these persons were boys and men of the neighbouring hamlets. (9)

(1)、(2)では代行者がある距離をおいて状況を観察し、次に人物の心理上の事実を読者に伝達する表現形式である。

(3)は当時、「言語学的な謎々」と批判されたもので、視点が遠方からの観察から急激に傍観者に移動し、そして田舎の若者達の情景になり、今度はその若者達の目から物語が語り続けられるという手法であって、語りの進行につれ事実や人物の行動が具象化されている過程は見事である。

I. A. Richardは作家は伝達の効果あまり意識せず、むしろ作品と経験を一致させる努力をすると述べている(10)が、結局その努力は伝達をより効果的にする方向をとり、Hardyの場合も外発的な事件を詳細に記述し比較することにより迫真性のある人物を創造する手法に定着し、1875年から1880年にかけての比較的初期の段階で既にプロットの進行、特に小説上で将来提示されるであろう事件の予告に効果をあげている。

この技法は、一つにはHardyの意識に最後まで存在していたと思われる願望、つまり現実の人生に直接関与することから逃れ人生をありのままの姿で観察でき、そしてその観察したことを報告できる安全な場所に身を置きたいという無意識の願望に通じるものである。

更に、人物を直接に指示することを避け、人物の社会的立場、職業、家族関係等の呼称を使用したり、抽象的な指示物をやや揶揄を加えて使用する手法も

A LAODICEAN の文体的特徴

上記の手法に共通するものである。これは特に“A Laodicean”, “The Hand of Ethelberta”で随所に見出される文体上の特徴で、登場人物相互がその場面でどんな関係にあるかを的確に読者に伝えると共に会話の前後で使用される場合は、人物の内面を正しく描出するのに効果的である。一見単純で、思いつくまま用いられているようで実はこれによって読者は自分と人物の間にある空間を設けてその人物を冷徹に観察でき、登場人物の間に存在する意識の共感を感じとることの出来る手法である。時としてこの表現は累層的になり、散文としては生硬な形式であるが、この時期における作者の感じ方や創造の過程を知る上で注目し得る特徴である。

PaulaはSomersetに好意を寄せているが、‘the Castle of the de Stancy’が持つ封建性の持つ良い面、つまり‘leisure, light-hearted generosity, intense friendships, …, healthy complexions, freedom from care’ (11)と自分自身の‘fanciful prédilection d’artiste for hoary mediaeval families with ancestors in alabaster and primogenitive renown.’ (12)から決断せず、自分を取り巻く状況がはっきり見えて来るまで信念に少しずつ修正を加えてゆく生き方をする。この微温的な二人の関係は次のようにpseudo-antonomasiaによって巧みに表現される。

(1) ‘My uncle, Mr Abner Power,’ said Paula suddenly to Somerset, as he came near, presenting the stranger to the astonishing young man. (13)

(2) Now that he was actually at the centre of his gravitation he seemed even further away from a feasible meeting with her than in England. (14)

(3) ……there still intervened two hundred and fifty between him and the end of suspense. (15)

Paulaの叔父であり、政治結社に参加し爆弾作りを専門としたが、保守派への転向を決意した矢先に暴発に巻き込まれ、すっかり容貌が変わったMr Powerと、Captain de Stancyの子でありながら、恥知らずな生活に満足するDareが、お互いの素性を暴露しながら対峙する場面では、一時弱い立場に追い込まれたDareがMr Powerに‘a mechanical engineer’, ‘the young man’, ‘our mechanic’, ‘our needy Englishman’, ‘the inventor of that explosive’, ‘our hero’, ‘a conspirators’ engineer’ (16)と次々に代辞を浴びせて、すっかり立場を逆転させてしまう描き方もこの手法である。

一家の為に結婚を決意するEthelbertaは一家に対する使命感から意の進まぬまま年老いたLord Mount-

clereに近づく。戯れであったLord Mountclereも彼女のこの悲壮な決意を知って次第に真剣な気持を抱くようになるが、彼女もそのことに気付く。お互いが手の内を知りながらそれを隠しつつ結婚への道をとる二人の偽善がこの間接的呼称の方法でうまく描かれる。

(1) Then her enamoured companion more widely opened his, and traced the beautiful features opposite him. (17)

(2) Ethelberta bade adieu to her attentive satellite, called to Cornelia, and entered a cab; (18)

(3) ‘You are quite sure you know between whom the love lies now — eh?’ Ethelberta asked in a sarcastic whisper of Lord Mountclere.

‘I am — beyond a doubt,’ murmured the anxious nobleman; he feared that look of hers, which was not less dominant than irresistible. (19)

このHardyの描き方が「時代」の文体から特別に際立った点を持っていたとは言えないが、平易な説話体であり、本質的には散文の形式である上記の特徴は“The Return of the Native”, “The Woodlanders”の巻頭における自然の崇高美を描く均衡のとれた分析的叙述に共通するものを持っている。「時代」の文体になりつつあった心理の葛藤に重点を置く描き方と違って、主に人物の外面の動きを観察し代辞として表現するものであるから、決して小説の基幹をなす表現ではない。しかし創造した人物を冷厳な法則に従って不可避な運命の皮肉に委ねるこの作者が代辞を人物に向けることによって物語の進行を一時的に止め、物語に自然の間合を取り戻すことができる。こうして登場人物が色々な名称を与えられているということは、作者がその人物を創造する時に種類の観点を持っていることであり、作品全体の多様性に結びついている。

後年、Tessと自然との同化を強調することによってTessを‘a pure woman’として弁語する立場をとったHardyがTessの主観を克明に描いた後で、度々、客観的な立場、当時の社会的慣習という観点から修正を加えざるを得なかったが、(20)初期の作品の場合、この修正はあらかじめ用意されている代称の形によってなされ、作者自身が小説中に顔を出し過ぎるといふ非難を招く原因ともなっている。つまり、適確に表現しておりながら、文章が心地良いものかどうかという情的批判から考えた場合は文体上の弱点となるものであろう。

3

小説にあつては descriptive style と narrative style がその大部分を占めるが、ある節や章をこのどちらかに分類できる場合は少なく、むしろ作家は単調さを避け場面に応じてこの二つを自由に組み立ててであろう。しかし人物の描写にあつては、特に作品に初めて登場する人物の描写では作家の持つ一面性が強調されて、いずれか一方の色彩が強くなる。Hardy の場合もこの一般的な例にもれなく、物語の進行は narrative style を、自然の情景描写には descriptive style を多用する一方、人物描写には極めて特徴のある手法が見出される。人物紹介、特にその人物の容貌を描くことによって小説のテーマや作者の人生観を明確にし、同時に物語の進行をある程度予測させる作家である。

ここでは descriptive (D), narrative (N) に限定せず、expository (E), argumentative (A) の機能からも検討する。(21)

Paula が初めて Somerset の前に登場する教会の場面は、(22)

humanly imperfect (N) / the best in woman-kind had gone over to the Dissenters (E) / the total dissimilarity between the expression of her lineaments and that of the countenances around her was not a little surprising (A) / emphatically a modern type of maidenhood (A) / she looked ultra-modern (A) / one who knew life fairly well (A) / her hair, of good English brown (D) / neither light nor dark (D) / too abundant for convenience in tying (E) / it threw off the lamp light in a hazy lustre (D) / this or that was flawless (A) / the nameless charm (N) / the spirit and the life were there (N) と分類することができ、一方統語の level から考えると、第一の文が though..., as is every face we see, it was... と三層の level である他は、それに続く20行が multi-level を避けている。従って addition, direction of movement, density of structure の要素は極めて少なく Paula の肉体的、精神的特徴を同じ level に羅列し、現実的存在よりはむしろ芸術的形象として描写しようとする傾向がみられる。Somerset を紹介する場面にも同様の特徴がみられ、人物が対象として客観的な取り扱いを受け絵画的な外面描写に終始している。

これに対して“A Laodicean”の三年前に上梓され、当時は“Under the Greenwood Tree”, “Far From

the Madding Crowd”並みの作品と称された“The Return of the Native”での Eustacia Vye の描写は、ある特徴に多様性を与えて強調し、特異性の内奥に達して一つの人格を作り上げる Hardy 独特の手法である。ここでも Paula, Somerset の紹介に類似した形式、つまり人物の容貌の描写にあつては選択的方法をとり印象的なものを選んで構造は極めて単純で屈折に乏しい英語で書かれ、叙述を一時停滞させる描出である。しかし前者とは違って、‘Queen of Night’の章で彼女が紹介されるや Egdon に展開される悲劇の様相、背景としての Egdon の役割、更には作者の運命観が統一のとれた悲劇的予感となって一気に提示される。Eustacia の悲劇は因襲が大きな役割を果たす Tess の悲劇とは違って、むしろ性格悲劇とされるべきものであるから、彼女の容貌、行動を通しての性格描写が一層効果的である。

full-limbed and somewhat heavy (D) / without ruddiness (D) / as without pallor (A) / soft to the touch (D) / as a cloud (A) / to see her hair (N) / fancy that a whole winter did not contain darkness (A) / to from its shadow (E) / it closed over her forehead (D) / like nightfall extinguishing the western glow (A) (23)

提示、例証の型が忠実に繰り返され、調和ある抑揚を備え、均斉のとれた文体である。これに続いて Eustacia の道徳的な気高さを描く箇所も、‘stroking tresses down’, ‘any of its thick skeins were caught’, ‘she would go back a few steps’ ‘their light, as it came and went, and came again’, のように事実を写す鋭い観察眼から生れた鮮明な映像に、‘her temper could always be softened’, ‘full of nocturnal mysteries’, ‘the colour of Eustacia’s soul’ 等の論証や説得の修辞が並行し、詩的観想と観念が緊密に結びつき印象の深い文体を構成している。創作年代が比較的近いこの二作の中心人物の描き方がこのような著しい対照をみせるのは、“A Laodicean”が the Stancy Castle の運命と「熱のない人」Paula の生き方を描き、新旧の対立という当時の社会的問題を扱う小説であるに対し、“The Return of the Native”が Egdon に美しい Eustacia を配し、Hardy の人生観を独特な芸術的表現にまでたかめた作品であるから、この点に関して言えば“The Return of the Native”は“Tess of the D’Urbervilles”よりも人生観そのものが前面に押し出された作品であると言える。

minor novels にみられる弱点は上記の Paula の場合に明白に現われているように動きを妨げる描写に

A LAODICEAN の文体的特徴

よって人物が特定の思考と感情を抱く人間として登場し、その為に人物描写が物語の構成、進行にとって補助的な役割しか与えられていない点である。

こうして効果的な描写と平面的な描写が肩を並べているのはHardyの文体上の特質であって、客観描写に代って人物の言行を解剖することにより物語が自然に展開する例と、narrativeからdescriptiveに至る表現の層が均衡を保てず作者の主観的態度から生れるリズムが小説全体との関連を失っている場合が考察されるのである。

〈注〉

- (1) Richard Carpenter : Thomas Hardy (Macmillan. 1976) p. 62
- (2) J. Middleton Murry : The Problem of Style (Oxford Univ. Press. 1967) p. 26
- (3) Thomas Hardy : A Laodicean (Macmillan. 1975) p. 406
- (4) Thomas Hardy : The Hand of Ethelberta (Macmillan. 1975) p. 127
- (5) A Laodicean. p. 49
- (6) Ibid. p. 272
- (7) Ibid. p. 376
- (8) The Hand of Ethelberta. p. 89
- (9) Thomas Hardy : The Return of the Native (Macmillan. 1975) p. 43
- (10) I. A. Richard : Principles of Literary Criticism (Routledge & Kegan Paul. 1970) p. 18
- (11) A Laodicean. p. 50
- (12) Ibid. p. 323
- (13) Ibid. p. 251
- (14) Ibid. p. 267
- (15) Ibid. p. 276
- (16) Ibid. p. 355
- (17) The Hand of Ethelberta. p. 261
- (18) Ibid. p. 261
- (19) Ibid. p. 261
- (20) David Lodge : Language of Fiction (Routledge & Kegan Paul. 1967) p. 177
- (21) Francis Christensen & Bonniejean Christensen : A New Rhetoric (Harper & Row. 1976) p. 19
- (22) A Laodicean. p. 45
- (23) The Return of the Native. p. 89